

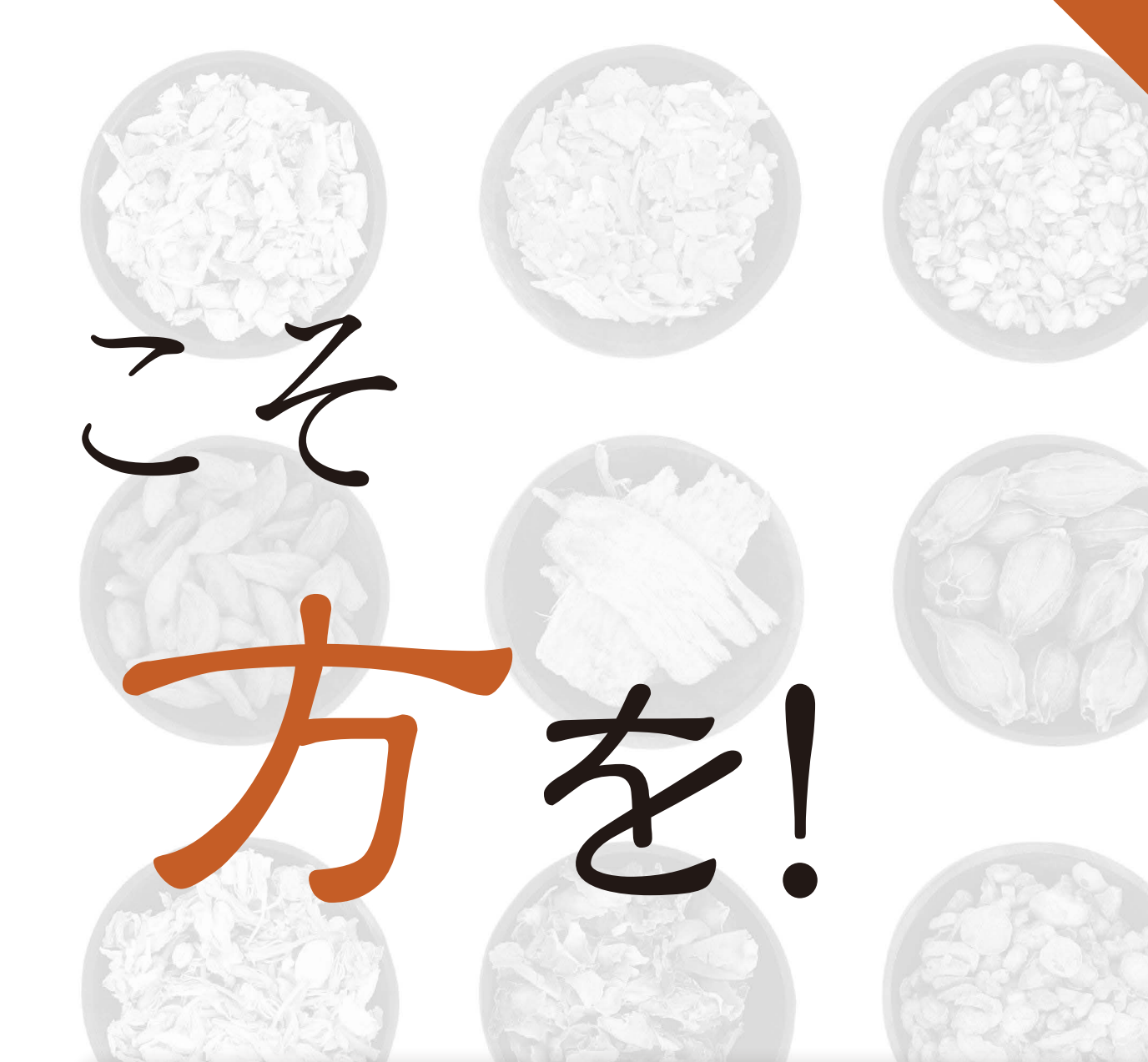
特集

こんなとき 漢

総合診療の場には多彩な訴えや、一人で多くの訴えを持つ患者が訪れる。診断がつき標準的な現代治療を行っても、患者の愁訴の改善に繋がらないこともある。そんなときに漢方薬を使用すると、問題解決に繋がることもある。

前回（本誌26巻3号特集）は漢方薬の使い方の基本や副反応を示したうえで、いくつかの特徴を目安に使用でき、漢方初学者でも効果を実感できる、エキスパートお薦めの2～3の処方、その典型的治療例と共に紹介した。本特集でも前回と同様の趣旨と構成で、日常診療のお役に立てる「こんなときこそ、この漢方」を紹介していきたい。具体的には、虚証と実証の漢方治療の実際とお薦め処方を、また、風邪の初期とこじれた場合の処方を、そのほか婦人科・小児科・緩和医療・疼痛・高齢者のマルチモビディティーの処方などを紹介する。

企画 | 岡部竜吾



こそ方を!

今月の Questions

- Q1 診療に際し、心掛けていることは何でしょうか? >>> 1612
- Q2 漢方診療に必要な「実証」や「虚証」という考え方は、何を基準にしているのでしょうか? >>> 1615
- Q3 疲労感を訴える人に対する漢方処方への選択は? >>> 1619
- Q4 風邪の漢方治療、その原則は? >>> 1623
- Q5 炎症症状は取れているのに、風邪症状が長引いて治りにくいことがあります。微熱が続いたり、胃部不快感が残ったり、咳が続くときの漢方はありますか? >>> 1630
- Q6 疼痛に対する漢方薬の使い方は? >>> 1634
- Q7 がんの緩和医療では、どのように漢方薬を用いればよいのでしょうか? >>> 1637
- Q8 小児の頻用処方なかで、応用も利いて使いやすい漢方は? >>> 1641
- Q9 妊産婦に、漢方薬を処方してもよいのでしょうか? >>> 1645
- Q10 高齢者のマルチモビディティーに対して、漢方薬は役立ちますか? >>> 1649